

2016年5月22日(日) 聖日礼拝説教 牧師 森田幸男

聖書 使徒言行録2章14節～24節

02:14 すると、ペトロは十一人と共に立って、声を張り上げ、話し始めた。「ユダヤの方々、またエルサレムに住むすべての人たち、知っていただきたいことがあります。わたしの言葉に耳を傾けてください。02:15 今は朝の九時ですから、この人たちは、あなたがたが考えているように、酒に酔っているわけではありません。02:16 そうではなく、これこそ預言者ヨエルを通して言われていたことなのです。02:17 『神は言われる。終わりの時に、わたしの霊をすべての人に注ぐ。すると、あなたたちの息子と娘は預言し、若者は幻を見、老人は夢を見る。02:18 わたしの僕やはしためにも、そのときには、わたしの霊を注ぐ。すると、彼らは預言する。02:19 上では、天に不思議な業を、下では、地に徴を示そう。血と火と立ちこめる煙が、それだ。02:20 主の偉大な輝かしい日が来る前に、太陽は暗くなり、月は血のように赤くなる。02:21 主の名を呼び求める者は皆、救われる。』02:22 イスラエルの人たち、これから話すことを聞いてください。ナザレの人イエスこそ、神から遣わされた方です。神は、イエスを通してあなたがたの間で行われた奇跡と、不思議な業と、しるしによって、そのことをあなたがたに証明なさいました。あなたがた自身が既に知っているとおりで。02:23 このイエスを神は、お定めになった計画により、あらかじめご存じのうで、あなたがたに引き渡されたのですが、あなたがたは律法を知らない者たちの手を借りて、十字架につけて殺してしまったのです。02:24 しかし、神はこのイエスを死の苦しみから解放して、復活させられました。イエスが死に支配されたままでおられるなどということは、ありえなかったからです。

説教『キリスト教会、最初の説教』

◆これは主イエス・キリストの弟子達による主都エルサレムにおける最初の路傍伝道です。それは勇気のいることでした。しかしかれらは地上のいかなる権威をも恐れぬ者にされていました。「イスラエルの人たち、これから話すことを聞いてください。ナザレの人イエスこそ、神から遣わされた方です。…このイエスを、…あなたがたは律法を知らない者たちの手を借りて、十字架につけて殺してしまったのです。」このように、弟子達は、神様と神様の意志にさからうイスラエルの指導者たちとイスラエルの人達の罪を率直に糾弾しています。このような弟子達の姿勢・態度は、弟子達が別次元の新しい世界に生きていることを表しています。

◆今日の『牧師の落穂拾い』を御覧ください。これは信濃町教会を興した高倉徳太郎牧師の式辞の一節です。「要するに教会の問題は量にあるのではなく質にある。教会はいくら量において増していても質において失敗であるなら、始めからやり直すべきと信じる。現代の祖国において神の求め給う教会は、量においてでなく、信仰の質において純なる教会であると思う。キリストとその十字架の贖罪的真理に立って内なる交わりがなされ、妥協なき福音においてのみ伝道の励まるる教会に神の国は託されている。」<高倉徳太郎 1930

年『信濃町教会献堂式式辞』より>これは、1930年の信濃町教会献堂式における式辞の一節です。この「1930年」が大事です。その翌年の1931年に満州事変が起り、いわゆる『15年戦争』へと日本は突き進んで行くのです。このように日本が戦時国家体制を強めるなかでの言葉です。信濃町教会は、富士見町教会から分裂して、1924年に高倉徳太郎によって起こされます。ここで、高倉が言っていることは、一応、正論と言ってよいでありましょう。しかし、今日の聖書における弟子達の伝道の結果は、2章41節に「ペトロの言葉を受け入れた人々は洗礼を受け、その日に三千人ほどが仲間に加わった」と記されております。教会の質と量は対立するものではないのです。このあと、高倉は、うつ病を発症し、1934年4月3日に自殺しています。教会内外の軋轢によったのでしょう。

◆私は先週の聖霊降臨節の説教において、このように申しました。「聖霊降臨とは、神様の命そのものの注入です。神様の全存在の施与、神様の全祝福の贈与、これが聖霊降臨の事実です」と。私達クリスチャンは、神様の祝福に満たされた、復活された主イエス・キリストが、わが内に生きておられる存在なのです。パウロはロマ書の8章35節以下でこう言っております。「だれが、キリストの愛からわたしたちを引き離すことができましょう。艱難か。苦しみか。迫害か。飢えか。裸か。危険か。剣か。『わたしたちは、あなたのために一日中死にさらされ、屠られる羊のように見られている』と書いてあるとおりです。しかし、これらすべてのことにおいて、わたしたちは、わたしたちを愛してくださる方によって輝かしい勝利を収めています。わたしは確信しています。死も、命も、天使も、支配するものも、現在のものも、未来のものも、力あるものも、高い所にいるものも、低い所にいるものも、他のどんな被造物も、わたしたちの主キリスト・イエスによって示された神の愛から、わたしたちを引き離すことはできないのです。」これが、私達クリスチャンの確信です。

◆先週はペンテコステの礼拝でしたが、キリスト教会最初の聖霊降臨節の時には、エルサレムに集まったイスラエルの人々は、(当時、イスラエルの民は、世界中に離散し、散在していたのですが)誰もが自分の生まれ故郷の国語で、ガリラヤ出身の弟子達が神様の大きな御業について語るのを聞いて驚いたのです。

<上田長老さん！今日の礼拝で、故郷のフィリッピンに帰られる村上正子ちゃんのために、私の説教を英語で通訳してくださいますか。ポイント、ポイントで結構ですから。>

◆さて、14節～15節を御覧ください。こうあります。「すると、ペトロは十一人と共に立って、声を張り上げ、話し始めた。『ユダヤの方々、またエルサレムに住むすべての人たち、知っていただきたいことがあります。わたしの言葉に耳を傾けてください。02:15今は朝の九時ですから、この人たちは、あなたがたが考えているように、酒に酔っているのではありません』と、ペトロは申します。酒に酔うというよりも、お酒がもう全身に染み渡っているのにもまして、神様の霊が全身に染み渡ったわけですから、霊に酔わされて、霊が、

神が語らせるままに、弟子達は語ったのです。そういうことなのです。14節に、「すると、ペトロは十一人と共に立って、声を張り上げ、話し始めた」とあります。この「立って」というのは、勿論、立ち上がったのです。座っていた者が、今までうずくまっていたものが立ち上がったのです。けれども、この「立って」というのは厳密には「立ち上がらされて」という言葉です。神様によって、イエス様によって、御霊によって『立ち上がらされた』のです。ですから意味としては「よみがえらされて」「復活させられて」ということになります。つい先頃までのペトロを知っている人が、今・ここに立って語っているペトロを見れば、別人と思ったことでしょう。とても、同一人物と思えなかったと思います。本当にペトロは、復活させられたのです。主イエス・キリストの復活の事実と、それ故の永久の現臨を証しすることは、復活の経験者でなければできません。自らが復活の経験者でなければ、その証言は説得力を持つことはできません。この事はキリスト教会の最初も今日も全く同じであります。

◆もう一度申し上げますが、「神の全存在と全賜物の施與、全祝福の施與、これこそが神の恵み、恩寵であります。」ペンテコステにおいてこの事が事実となったのです。弟子達は、この恩寵に与り、死線を越えた復活の命、永遠の生命を生きる者とされたのです。ヨハネによる福音書11章25～26節にこのようにあります。<11:25 イエスは言われた。「わたしは復活であり、命である。わたしを信じる者は、死んでも生きる。11:26 生きていてわたしを信じる者はだれも、決して死ぬことはない。このことを信じるか。」11:27 マルタは言った。「はい、主よ、あなたが世に来られるはずの神の子、メシアであるとわたしは信じております。」>主イエス・キリストを信じるということは、死んでも死なない命に、今・ここで生かされるということです。これこそが神の恵み、恩寵であります。

◆今日の聖書における使徒ペトロの説教を聞いていて、強く思わせられることがあります。それは神様の御言葉、神様の約束の御言葉は必ず成就するということです。「一事が万事」と言います。これは神様の御言葉、イエス様の御言葉にこそ当てはまることです。15節以下にこうあります。<15 今は朝の九時ですから、この人たちは、あなたがたが考えているように、酒に酔っているのではありません。16 そうではなく、これこそ預言者ヨエルを通して言われていたことなのです。17 『神は言われる。終わりの時に、わたしの霊をすべての人に注ぐ。すると、あなたたちの息子と娘は預言し、若者は幻を見、老人は夢を見る。18 わたしの僕やはしためにも、そのときには、わたしの霊を注ぐ。すると、彼らは預言する。19 上では、天に不思議な業を、下では、地に徴を示そう。血と火と立ちこめる煙が、それだ。20 主の偉大な輝かしい日が来る前に、太陽は暗くなり、月は血のように赤くなる>正に驚天動地のことが、事実、起ったのです。一人の偉大な預言者が現れるというのではないのです。老いも若きも、主イエス・キリストを信じる者は、主イエス・キリストにおける神の恵みを証する使徒・預言者になるのです。神様の御言葉、神様の約束の御言葉は必ず成就するということです。「一事が万事」と言います。これは神様の御言葉、イエス

様の御言葉にこそ当てはまることです。先日発行しました『教会創立130周年記念文集』の中で柴田由起子姉がイザヤ書にある神様の御言葉との出会いについて書いておられます。イザヤ書43章4節～5節です。『わたしの目にあなたは価高く、貴い。…恐れるな、わたしはあなたと共にいる。』神様がこのように言われたら、それを守り通されるのです。

◆先週の聖書を読む会において詩編第117篇を改めて読みました。諸訳を読み比べ、わたしはこのように訳しました。

1：すべての国よ、ヤハウエを誉めよ。すべての民よ、ヤハウエを讃えよ。

2：誠に主の慈しみは我らの上に漲り溢れ、その真は永久に変わることはない。

ヤハウエを誉め讃えよ。

正にこの詩編が感謝に溢れて歌っておりますように、神様の慈しみと真とは、私達の上に漲り溢れ、永久に変わることはないのです。正に私たちの今は、その恵みと真とに満たされ、包まれている今・ここなのです。この幸いは永久に崩れる事はありません。

◆時々、その名を上げますボンヘッファーの言葉にこのようなものがあります。『教会として実存するキリスト』『教会は地上におけるキリストの現臨であり、現臨し給うキリストである。』このことを私達は、『教会はキリストの体』と、繰り返し告白しているのです。そして私達は、その体の肢々として、復活の主・現臨の主イエス・キリストと一体なのです。正に、感謝すべき、厳粛なる事実、幸いであります。

◆昨年春のオープン・チャーチの時のゲストシンガー、オーラ・リードさんは、その証しのなかで、こう言われました。“My Life is a living Testament.”と。「わたしの人生は生きた聖書です」と。「わたしの命こそ神様の恵みの証しです」とも意識できます。最初この言葉を聞いた時は、「えっ!」と思わないでもありませんでしたが、これこそキリスト者の生きた告白であり、感謝の告白であります。ですから、私たちキリスト者すべての証でもあります。私達の心からの感謝の証しとして、これからの日々を歩んでまいりましょう。

◆お祈りいたします。

恵みと真とに満ち給う主イエス・キリストの父なる神様。

あなたの尊い御名を讃え、心から讃美いたします。私達があなたを知らず、あなたに背き、罪の中にある時も、あなたはその溢れる憐れみをもって、お守りくださいました。今そのことを新たに覚え、心から感謝いたします。

父にいまし、御子にいまし、御霊にいますあなたが、私達の上に漲り溢れ、私達の内に満ち満ちて居ます恵みを覚え、心から感謝いたします。

今も、永久に、常にあなたの御臨在をこの身に感じ、御恵みを証する私達一人一人であらしめて下さい。北教会であらしめて下さい。

この感謝、願いを、主イエス・キリストの御名を通し御前にお捧げ致します。アーメン